

千葉大学グローバル関係融合研究センター

Center for Relational Studies on Global Crises(CRSGC), Chiba University

千葉大学グローバル関係融合研究センター・ワーキングペーパー



The CRSGC-Chiba Working Paper Series



©K. Sakurai

イラクにおける 1991年インティファードの 記憶と祖国防衛

酒井 啓子

CRSGC-WP

No.2 31 Mar. 2018

イラクにおける 1991 年インティファダの記憶と祖国防衛†

酒井啓子

(グローバル関係融合研究センター長

／大学院社会科学院教授、千葉大学)

要約: 中東地域においては、2003 年および 2011 年以降、宗派を巡る対立が先鋭化しているように見え、その原因解明に「安全保障化」議論がしばしば適用される。特に「イスラーム国」が本格的な脅威となった 2014 年以降、中東域内では対イラン脅威論が宗派主義的認識に転換されることを安全保障化の枠組みで説明されがちである。これに対してイラク国内では、「イスラーム国」に対する戦いを担う人民動員機構が宗派偏向的に徴募され、イランの影響を強く受けているという宗派主義化の様相は見られるものの、実際には人民動員機構を 1991 年の全国的反政府蜂起（インティファダ）と重ね合わせることで、「イスラーム国」との戦いをシーア派のものではなくイラクの祖国防衛の試みであるとして、「脱宗派主義化」しようとの模索を見て取れる。一方で、祖国性の象徴としてその記憶が再生される過程で、インティファダの解釈に変質が起き、結果的に「静かな宗派主義化」が進行している。

† 本稿は、2018 年 1 月 26-28 日英オックスフォード大学で開催された国際会議「中東におけるナショナリズム、宗派主義とエスニック・宗教的な動員」 Re-thinking Nationalism, Sectarianism, and Ethno-Religious Mobilisation in the Middle East" にて、科学研究費補助金基盤 A 「宗教の政治化と政治の宗教化：現代中東の宗派对立における社会的要因と国際政治の影響」(16H01894)研究事業の一環として筆者が行った研究報告を、加筆修正したものである。

イラクにおける 1991 年インティファードの記憶と祖国防衛

はじめに

2006-7 年、イラク国内で「宗派の差異」が原因とみなされる内戦状況が発生して以来、中東における紛争の宗派的要因や、宗派のトランスナショナルなネットワークに基づいた政治の連動性に、関心が高まっている。そうした現実の展開を反映して、「宗派」とは何か、宗派に基づく差異がなぜ急速に政治化したのかを解明しようとする研究が、イラクのみならず湾岸地域やレバノンの事例に関して、2010 年以来多数発表された (Davis 2010; Haddad 2011, 2013; Louer 2012; Marechal and Zemni 2013; Matthiesen 2013 Visser 2012; Weiss 2010; Wehrey 2014; Potter 2014)。

さらに 2014 年、「イスラーム国」(Islamic State, アラビア語で Da'ish)がイラク北部に侵攻、モースルを始めとして北部、西部諸都市を制圧してシリア、イラクに勢力基盤を確立すると、その露骨なシーア派排除姿勢とイラク政府軍との間で展開される過剰な暴力から、宗派对立の定着、暴力化、過激化を巡る研究上の関心が高まった。特に宗派意識が「宗派主義」へと展開し、宗派に基づく集団の凝集力を強めている現状を、「宗派主義化 sectarianisation」と捉えて分析した論考、書籍が、多く出版された (Abdo 2016; Hashimi and Postel 2017; Gause 2014; Haddad 2017; Hinnebusch 2016; Matthiesen 2015; Mneimneh 2016; Osman 2014; Wehrey 2017)。

また、宗派問題を論ずる際、1979 年のイラン革命以来、主にイスラームの宗派のなかでも少数派に位置する「シーア派」が議論の対象であったが、その一方で 2014 年以降は「イスラーム国」の持つスンナ派性の過度な強調に注目して、特にジハード・サラフィー(Jihādī/salafī)主義における宗派主義に焦点を絞った研究が増えていることも、近年の特徴である (Maher 2016; Rougier 2015; Steinberg 2009; Wagemakers 2014)。

これらの議論の多くは、「宗派」と称される集合的帰属意識の被構築性、政治化の結果としての側面に注目している。こうした構築主義的アプローチ (constructivism) は、「宗派」を前提に中東社会を論じる「モザイク社会論」などの本質決定論 (primordialism) を「複雑かつ複層的な側面を持つこの地域に対して短絡的かつ簡便に過ぎるアプローチ」であると批判、宗派分析において適切ではないと退けてきた (Wehrey 2017)。

その一方で、道具主義的アプローチ (instrumentalism) に対しても、宗派主義が「ただ政治的、物質的目標のための闘争の手段にしかすぎない」と見なす点を批判する議論が見られ

る。Dixon は、道具主義的アプローチはともすれば、宗派紛争を解決するにはそれを道具として利用する政治主体（特に政権母体）を民主化する、あるいは排除する必要がある、という結論に陥りやすい、として、警鐘をならしている(2017: 14-16)。

現在宗派主義の存在を前提として紛争を論ずる議論は多いが、そもそも宗派主義とは何か、あるいは宗派に基づいたアイデンティティはいかなるものなのか、定義が明確にされておらず (Haddad 2017)、実態として宗派意識や宗派主義が当該社会でどのように機能し、それがいかなる政治環境の変化に伴っていかに変質しているのか、いずれのアプローチも一般像を描くことには成功していない。そこで必要とされているのは、道具主義的アプローチが前提視する「上からの宗派主義化」が、具体的にいかに展開され、いかに社会に浸透しているかを解明することであり、同時にその「上からの」作用に対して、社会が、受容であれ拒絶であれ、いかに呼応しているかを見ることである¹。

本稿では、2003年以降のイラクにおいて宗派的とみなされる紛争が頻発していることを踏まえて、そこで宗派意識が国家レベル、社会レベルでいかに政治的に操作され、変質しているかを、歴史的記憶の再生、書き換えの過程を通じて見ていくこととする。特に、2014年以降の「イスラーム国」に対する戦いにおいて、宗派意識の活性化に並行して、歴史的な国民統合のシンボルが果たす役割の変容に、着目したい。なぜならば、戦後のイラクにおいては宗派主義の深化が観察されながらも、それが分断要因にはなりえないこと、イラクの国民統合度合いは強いことが、しばしば強調されるからである。本稿では、域内外の環境が宗派主義の進展を示唆しているにも関わらず、何がイラクの宗派主義化を抑制する要因であり、宗派を超えた国民としての一体性を打ち出す要因として働いているのかを、研究上の問いとして提起したい。

第1章 宗派对立の背景にある犠牲者意識とネーションの記憶

第1節 「上からの」宗派主義アプローチと「日常の」宗派主義アプローチ

冒頭に述べたように、宗派主義に関する議論が盛んになったのは、2003年のイラク戦争の結果、イラクにシーア派イスラーム主義政党を中心とした新政権が成立し、それと平行してイラク社会にシーア派色の強い儀礼や集団行動が頻繁に見られるようになったことを契機とする。そのため、イラク戦争直後に主流となった議論は、宗派意識の高まりと政治

¹ Max Weiss (2017) は、「上から」を「国家の宗派主義」、「下から」を「路上 street の宗派主義」と表現している。

化（すなわち宗派主義化）の原因は、戦争に代表される国外からの介入による政権交替という政治的環境の変化にある、とするものであった。たとえば、Dodge (2007)は、国家による特定の宗派に対する排除政策や、政党の支持基盤拡大のための宗派的動員政策が、宗派主義の出現を生んだとする議論を展開している。Mansour もまた同様に、宗派紛争の原因は政権によるアイデンティティ・ポリティクス の起用だとする (European Parliament 2017) 。これらは、「上（国家）からの宗派主義化」に注目したアプローチである。

そして、政府、政党による動員に注目する議論のなかでも、Matthiesen (2013) や Malvig (2015) は、宗派对立の発生、激化における「安全保障化」 (securitization) の過程に着目する。Matthiesen は、サウディアラビアを中心とした湾岸アラブ諸国におけるシーア派社会が、国内での社会経済的格差を問題視してきたとはいえ主流派においては基本的に共存を志向してきたことを指摘し、その上でサウディ政府が、対外政策、特に対イラン政策の関連で国内シーア派をイランと密接につながるものとしてサウディの安全保障を脅かすものと見なしてきた、と論じている。酒井 (2015) もまた、内戦後のイラクにおいて、与党たるシーア派イスラーム主義政党と野党のスナ派イスラーム主義政党が、対立原因を宗派に帰することを微妙に避けつつ、それぞれの政敵を「バアス党、異教徒視 (takfiri) 主義者」、および「宗派差別的民兵＝イラン」と措定して、宗派性を「安全保障化」した敵認識を行っていることを指摘した。

「上」からの動員という点では、近年は、動員主体として政府や政党よりむしろ宗教的知識人（ウラマー、‘ulamā）に光を当て、彼らの宗教的発信（モスクを通じた説教やファトワー、インターネットを通じたメッセージの発信）の役割に注目した論考も増えている。Abdo が代表例であり、宗派对立の浸透しやすさや堅牢さは、宗教的差異やそれに関連した宗教的アイデンティティから生まれるもの、と主張する (2017:12)。上述の安全保障化の議論が上＝国家、政治エリートからの動員を対象としていたのに対して、Abdo らの議論は、宗教的ネットワークを通じた動員を強調する。これは、「宗教の無冠化 dethroning religion」を主張し宗派对立を政治の産物とみなす Hurd (2015) のような議論とは、真つ向から対立する論点であろう。

このように、宗派主義の「動員」側面により光が当てられがちなのに対して、文化的アイデンティティや日常的な集団行為に着目した論考を多く発表しているのが、Haddad (2011) である。彼は、ナショナリズム研究の分野で論じられるバナル・ナショナリズム (banal nationalism) の発想を宗派主義に当てはめ、「日々の宗教儀礼に見られる... マーカー」として

のバナル宗派主義、すなわち「下からの」宗派主義の存在に光を当てる (2011:27)。

第2節 歴史的記憶の蓄積のなかで構築された「犠牲者意識」の宗派化

(1) 国家による安全保障化と社会の対応

宗派主義の「上から」か「下から」か、という議論は、上述の Wehrey に限らず多くの研究者が、いずれの方向からでもそれ単独では現状の宗派主義の蔓延を説明することができないことに合意している。そのことを踏まえて、本稿では、「上／国家からの」とみなされがちな「安全保障化」の議論においていかに「下／路上」の要素を組み込んだ包括的なアプローチを取りうるか、試みたい。

Wehrey が指摘するように、道具主義的アプローチは「個々の選好やエージェンシーの存在、集団的記憶や信仰」を軽視しがちである (2017:6)。そのため、本稿では、国家や政治エリートによる「上」から、「下／路上」、すなわち社会レベルを「安全保障化」という垂直的操作の側面のみならず、社会レベル、地域共同体レベルで「安全保障化」が進むか否かという水平的相互作用の側面に着目する。垂直的操作においては、国家が外国との対立が国家存亡の危機をもたらしうることを強調して国内の諸社会集団を統合する、あるいは反政府運動を外敵と連関しているものとして排除するメカニズムが働く。しかし水平的相互作用においては、国家の介在とは別に、各社会集団が個別の社会の危機意識に訴えることで、他の社会集団との対立を固定化させるメカニズムが働く。

だが、そこで国家と社会の連関性ないし齟齬は、何を見ることでつかみ取ることができるだろうか。そこでは、安全保障化が惹起されるに足るさまざまな「存亡の危機」的事件が国家レベル、社会レベルでどのように認識されたか、パーセプションの変容を分析することが重要になる。先行研究では、周辺国を中心にメディアの論調分析を行い、域内でのパーセプションにおける安全保障化を論じた (酒井 2017)。本稿が焦点を絞るのは、イラク国内の社会レベルにおいて、「存亡の危機」的状況下でいかなる歴史的記憶が構築され、変質していったか、という点である。

(2) 宗派としての犠牲者性

歴史的記憶のなかで重要なのが、「犠牲者としての記憶」である。過去を再生する際に、犠牲となった記憶、辺境化された記憶は、犠牲者、辺境化された経験を持つ者にとって、その環境を転換し、加害者、中央に対して反旗を翻すための正当化事由となる。イラク戦争において、フセイン政権を加害者とみなし、その政権下で自らが辺境化されたと考える

クルド民族やシーア派住民が、戦後の新政権において中央政府における権力掌握を主張したのは、その典型的な事例と言えよう。

特にシーア派社会においては、2003年までのイラクのサッダーム・フセイン政権下で辺境化の記憶に加えて、シーア派独特の「犠牲者としての歴史」を維持、継承する²。歴史的に定例化された犠牲者化の記憶は、再生され、抵抗や反乱、あるいは戦い一般を正当化する一因となりうる。それは、2014年6月に「イスラーム国」がモースルを制圧し、その後アンバール県、サラハッディーン県への支配領域を広げた際に、「イスラーム国」は徹底してシーア派をイスラームと見なさない姿勢（異教徒視、*takfir*）をとった際に起動された。「イスラーム国」がシーア派という宗派の存在自体を脅かしたことで、シーア派社会のなかから「イスラーム国」との戦いに全面的に賛同し戦闘に加わる義勇兵が多数生まれたが、「イスラーム国」との戦闘のなかで、頻繁にシーア派的なレトリックが起用されたのである。これらの作戦名にシーア派イマームを讃える用句が使用されたのに加えて³、戦闘時にシーア派独特のナシード（*naṣīd*、謡）が詠唱されたことが報じられている。

だが、歴史認識に支えられた「犠牲者」認識をてこに「友・敵関係」が構築され、それが宗派に基づく対立に転化されるのは、シーア派社会に限定されたことではない。2003年以降のスナ派社会においては、イラク戦争で辺境化されたイラクのスナ派住民のみならず、アラブ世界全体で相対的な劣位意識が醸成されていたと言える。それは必ずしも「スナ派」という宗派として始まったものではなく、むしろイスラーム世界全体の、国際社会、特に欧米諸国に対する劣位意識、フラストレーションに起因するものである。それは、2001年の9.11事件に始まる米主導の「対テロ戦争」においてイスラーム世界全体が国際社会から警戒視され、対イスラーム蔑視感情が生まれたこと、さらに遡って1991年の湾岸戦争により圧倒的な米軍のプレゼンスがイスラーム世界に出現したという、政治環境の変化と無関係ではない。

このイスラーム世界が抱える西欧による犠牲者という自己認識は、19世紀以降の西欧の

² 第三代目のイマーム、フセインがカルバラでウマイヤ朝の大軍に包囲され殺害された歴史的な事件は、その後アーシューラー（‘Āshūra、死後10日の追悼行事）、アルバイーン（Arba‘īn、死後40日の追悼行進）といったシーア派（12イマーム派）独特の宗教儀礼として社会的に継承され、これらの儀礼を通じて「犠牲者」としての自己認識とそれを悼む行為がレパトリ化された。

³ たとえば2015年のティクリート奪回作戦では「(イマーム) マフディのために (Labayk yā Maḥdī) 作戦」という名前が、ラマディ奪回作戦では「(イマーム) フサインのために (Labayk yā Ḥusayn)」との作戦名が使用された（酒井2017: 24-5）。

植民地進出、中東地域への支配という歴史的経験に遡ることができる。しかし、この近代以降連綿と続く西欧によるイスラーム世界の辺境化という認識が、宗派意識と接続したのは、1979年のイラン革命に起因し、2003年のイラク戦争によって生まれた域内の権力バランスの変化によってである。

アメリカが主導したイラク戦争によって結果的にイランの域内での影響力が増大し、平行してレバノンのヒズブッラーなどのイランが支援するシーア派イスラーム主義勢力が存在感を増すことになったことで、ヨルダンや湾岸アラブ諸国の間での対イラン＝シーア派に対する脅威視が生れた。すなわち、19世紀以来の「西欧の脅威」に加えて「イラン＝シーア派」が、イスラーム世界を脅かしイスラーム内部から堀崩す「内なる敵」見なされる構造が生まれたのである。この認識は、戦後のイラクでアンバール県やニネヴェ県などのスンナ派住民が権力中枢より排除され辺境化されたという現実と重ね合わされて、犠牲者としてのスンナ派との認識へと発展した。

こうした中東域内の環境変化が、「イスラーム国」に代表されるような狭隘な宗派主義、他宗派に対する排外主義を、スンナ派の間に生み出したといえよう。

第3節 本稿のアプローチ：安全保障化とナショナルを表象する歴史的記憶の変質

(1) 「ネーション=祖国性」を取り合う競争

ところで、誰が犠牲者かを争点とする宗派对立は、それぞれの宗派が自治、分離を求める方向性を取らない点に特徴がある。この点は、明らかに民族自治、独立を射程に入れて集合的に行動するクルド民族などとは異なっている。すなわち、犠牲者であることの自己認識とそれに基づく権利回復の要求は、イラクという既存の国家枠組から分離して独自の主権を確立することで実現されるのではなく、イラク国家の中、あるいはイスラーム世界全体において辺境化された自派こそが中央に位置するべきであるという主張となる。

このことは、イラクでそれぞれの宗派に支持基盤を置くイスラーム主義政党が政敵をどのように批判しているか、その内容を見ればよくわかる。シーア派イスラーム主義政党であるダアワ党 (Hizb al-Da'wa al-Islāmī) は、スンナ派中心に広がるイスラーム武装勢力に対して、これを「異教徒視するもの」として非難し、反対にスンナ派に支持基盤を持つイスラーム党 (Hizb al-Islāmī) は、シーア派民兵に対してこれを「宗派主義者 (tā'ifī)」と非難している。いずれも、自派が他者から排除されている、その排除する主体が政敵であるとのロジックで、非難が展開されているのである (酒井 2015)。

換言すれば、イラクにおいて宗派同士の対立に見える競争は、いずれがイラクというネーション=祖国 (watan) とその国民を代表するののかという点を争点としている点に特徴がある。広く知られているように、アラブ社会におけるネーション概念には、いわゆるアラブ民族全体の統一、連帯を主張するアラブ・ナショナリズムと同義で使用される qawmiya と、狭い範囲での祖国意識に基づくそれぞれの国のナショナリズム (一国ナショナリズム) を意味する wātāniya と、2種類の異なるアラビア語が充てられる。現在では、後者は植民地支配の産物である現在の国境に基づく領域国家が持つナショナリズムとほぼ同義で使われることが多い。つまり、現在のイラクという国の領土的枠組みを変更することなく、その国家領域内で誰が「祖国」を担う資格を持つのか、その要件を巡って対立が展開されているのである。

ここではその wātāniya を、とりあえず「祖国性」と呼んでおこう。Wātāniya というアラビア語の意味は、「愛国」のニュアンスを強く含んだ単語だからである。問題は、その「祖国性」を象徴するものが宗派意識へと矮小化されるとすれば、それはいかなる経緯によってか、という点である。またその犠牲者意識が特定宗派に偏向している場合、それはいかかに「祖国性」を代表するものへと転換、昇華されるのだろうか。

後者の代表的な事例は、イラク建国前夜に発生した反英暴動 (1920 年革命) の歴史的記憶の再生である。南部部族を中心に発生した反英暴動は、イラク現代史のそれぞれの局面で、特定地域に限定した暴動ではなくナショナリズムの枠組みで解釈されたり、あるいはイスラーム主義の文脈で解釈されたりしてきた。南部シーア派社会の運動として限定されがちなこの暴動の名前を、現在スンナ派地域の反米抵抗運動母体とその軍事部隊名として起用していることは、ナショナルな歴史的記憶がいかにさまざまな形で再生され再解釈されているかを示している。

一方で、1991 年にイラクで発生した全国的な広がりを持つ反政府蜂起 (インティファダ、intifāda) は、前者、すなわちナショナルな広がりを持つ運動が特定宗派に偏向して解釈されやすい傾向を持つという例であろう。本論では、1991 年インティファダがイラク国内社会で何を象徴するものとして記憶されたのか、特定の社会集団のための記憶に限定されたのか、それとも国民統合を記憶するものとされたのかを分析する。インティファダは、結局政権側に鎮圧され大きな犠牲を出して終わったが、そのことがこの蜂起を「犠牲の記憶」として残した。その点で、インティファダをどう記憶しどう再生するかは、犠牲者を誰と措定し、その犠牲の原因となった「敵」を誰と措定するかという、安全保障

化のメカニズムに密接に関連するのである。

第2章 1991年インティファダとは何だったのか：主要アクターのパーセプション

本章ではまず、1991年3月に発生した反政府蜂起がいかに発生し、誰が、何を目的として起こしたのかについて、概観しておく。

第1節 蜂起の経緯

1991年インティファダ（以下インティファダ）は⁴、1991年2月28日、湾岸戦争の停戦直後にバスラ県で始まり、イラク南部、北部へと広い範囲で発生した、共和政政権成立（1958年）以来初めての大規模な民衆による反政府蜂起である。この蜂起を早い時点で報じた英『デイリー・テレグラフ』紙サフワン（イラク南部）特派員によれば、湾岸戦争停戦によりクウェートから撤退したイラク将校が、その戦車でバスラ市中心にある巨大なフセイン大統領肖像画を砲撃した。そのことでイラク人の「恐怖の壁が壊れ」（Cerf 2003: 118）、一斉に反政府蜂起が全国的に拡大した。バスラ県から始まり、翌日には近隣のディーカール県、マイサン県、ムサンナ県に拡大、3日目、4日目にはシーア派聖地のナジャフ、カルバラまで波及した。その結果、1週間のうちには南部8県全体が反政府側の手に落ちた。一方で、蜂起は北部のクルディスタン自治区にも飛び火した他、首都バグダードでも主としてシーア派住民の多い地域（カーズィミーヤ、サッターム・タウン、フッリーヤ、シェアラ）でも蜂起が見られた（al-Halafi 2017:164）。全国18県のうち、スンナ派住民の多い中部の3県（サラハッディーン、アンバール、モースル）は政府側が支配し続けたとはいえ、モースル、アンバールの一部でも蜂起が記録されている⁵。

蜂起から1週間ほどして、政府は反政府勢力への本格的な軍事鎮圧行動を開始、3月15

⁴ インティファダとの用語は、アラビア語でもともと反乱、暴動を意味するが、1987年末以降イスラエル占領下のパレスチナ地区で広く民衆の間に広がった素手での反占領対抗運動がインティファダと呼ばれたため、市民運動色の強い抵抗運動、反政府運動全般をインティファダと呼ぶようになった。イラクでの1991年蜂起は、国内で突発的、自然発生的に起きた蜂起でありその蜂起母体、指揮系統や組織などが不明であったため、後述するように当初呼称が定まらなかったが、発生形態において広範な市民の参加が見られたこと、国際社会に市民運動性をアピールする観点から、この呼称が定着した。

⁵ 当時国外から反政府暴動を呼びかけていたイラク国民会議（Iraq National Congress）の声明は、イラク全土の県での蜂起を呼びかけており、そこにはモースル、アンバール、サラハッディーン県の名前も見ることができる。“Opposition Leader Appeal Saddam’s Ouster”, *Voice of Free Iraq*, 5 March, 1991 (FBIS, 6 March 1991)。また、実際にティクリート(サラハッディーン県)、モースルでも蜂起が実現したとの反体制派（SCIRI）報道もある。“Republican Guards Said Joining Revolt”, *Damascus Domestic Service*, 7 March 1991.

日にはナジャフやカルバラで蜂起が発生したことを公式に認めて、翌日には平定宣言を行った。政府軍による平定作戦の過程で多くの死者が出、集団墓地に埋められたとされるが、その具体的な死者数は明らかでない⁶。その他、カルバラのフサイン廟（‘ataba al-ḥusaynīya）が砲撃により破壊されたり、シーア派最高権威であるアブール・カーシム・フーイ（Abū al-Qāsim al-Khū‘ī）が軟禁状態に置かれるなど、南部シーア派の宗教的シンボルが攻撃の対象となった。

第2節 蜂起に対する在外反政府勢力による解釈

バアス党、特にフセイン政権時代のイラクにおいては、国内での反政府活動が厳しく弾圧され、組織的な活動がほぼ全面的に不可能だった。そのため、クルディスタンで活動を続けるクルド諸政党やそれに共闘する左派政党を除けば、ほとんどの主要反政府活動は、古くは1960年代にイラク共産党が、また最も新しい反政府組織であるシーア派イスラーム主義組織でも80年代初めには国外に活動拠点を移さざるを得ず、国内社会から遊離していた。よって、インティファードの発生も予想されていなかったし、自然発生的でかつ組織化されていない一般民衆が蜂起の中心となったとみなされた。

その結果、海外に拠点を置く主要反政府組織は、それぞれが得た断片的な情報と政治的スタンスに基づいて、インティファードを解釈することになった。まずイランに拠点を置くシーア派イスラーム主義組織（具体的にはダアワ党、イラク・イスラーム革命最高評議会 [イラク・イスラーム革命最高評議会 Supreme Council for Islamic Revolution in Iraq, SCIRI]、イスラーム行動組織[munazzana al-‘amal]など）は、インティファードをイランで起きたものと同様の「イスラーム革命」の連続と見なし⁷、自らの政治勢力の傘下にある、あるいは影響下にする国内組織が蜂起の主導権を取ったと主張した。

これらイスラーム主義組織の系統にある研究者、活動家による記録もまた、同様の視点を提示している。反乱側によって「解放」された地域にイスラーム主義を示す緑旗が掲げられたこと（Hilli 1992: 164）、またシーア派色の強いスローガンが掲げられたと指摘する記録は少なくない⁸。また、イスラーム主義組織を中心にイラクの反政府活動史を記した

⁶ たとえば、環境保護団体「グリーンピース」は、「信頼できる情報はわずか」としながらも、民間人3万人とイラク兵士5000人が死亡したとしている。Human Rights Watch (1992) 参照。

⁷ SCIRIは、暴動発生直後にはこれを「革命」(thawra)と呼んでいた。

⁸ Al-Majidによれば、インティファードを「イマーム・フセインの革命」と呼ぶスローガ

al-‘Ujūlī は、「解放」地域に革命執行指導部が形成され、地域社会の軍事から行政までさまざまな運営を担い、「ジハードについての民衆の意識高揚」を図ったと指摘している (al-‘Ujūlī 2000)。また、特にイラン・イラク戦争時代から脱走兵や政治犯の逃亡・潜伏先となっていた南部湿地帯で、上記の在外イスラーム主義組織が彼らの集団的軍事行動を統括、指導してきたとも主張されている (Ra‘ūf 2000)。

反対に、ロンドンやクルディスタン自治区に活動拠点を持つイラク共産党は、こうしたイラン革命型の組織形成やスローガンを批判し、インティファードがシーア派イスラーム主義組織のみによって主導されているのではないこと、フセイン政権に反対する広範な民衆蜂起であることを強調した。特にイラクー国ナショナリズム (waṭaniya) の存在を象徴する民衆蜂起として捉え、蜂起中心となったシーア派やクルド民族のみの行動ではなくイラク国民の一体性を維持する性格の蜂起であるとみなした。元共産党の活動家でもあった社会学者、‘Abd al-Jabār は、「湾岸戦争以降イラクでは、政府の公的ナショナリズムであるアラブ・ナショナリズムとは別に一国ナショナリズムが発展してきたが、インティファードはイラク社会がこの2種類のナショナリズムを明確に分けて考えることができた初めての契機であった」と述べている (2000: 96)。

このように、インティファードが何だったのか、どのように解釈しどのように将来に記憶していくかは、それをフセイン政権に対する重要な反政府活動と位置付ける反政府勢力の、それぞれの政治的スタンスと支持基盤によってまちまちであった。そのなかで、政治的スタンスに関わらず共通の認識として継承されたのが、蜂起後の徹底的な政府による弾圧の記憶であった。そしてそれに並行して、「インティファード参加者＝フセイン政権の犠牲者」という認識構造が確立された。

むしろ、その中でも「シーア派」という宗派特定で「犠牲者」認識が定着したことは、看過できない重要な側面である。蜂起鎮圧のために南部に派遣されたイラク軍の戦車の側面に「今日からシーア派はいない (lā shī‘a ba’d al-yawm)」と大書されていたとの「鎮圧の記憶」は、南部住民に始めて、政権が「シーア派」を名指しで排除するのだという宗派差別政策を認識させるものだった (Sakai 2003)。

この「政権の暴力的弾圧の犠牲者の記憶」としてのインティファードは、1980年代まで「政権の犠牲者」は政権に対して明確に反対姿勢を取ってきた特定の反政府組織、活動家

ンの他、バーキル・サドルを殉教者として讃えるもの、「西も東もないイスラーム革命を」とのイラン革命同様のスローガンが掲げられた (al-Mājid 1991:43)。

のみであったのに対して、「犠牲者」の対象をイラク国民全体に広げる「国民的記憶」となりうるものだったといえよう (al-Mājid 1991: 16-18; Sha‘bān 1994:96-97)。

では、その記憶は2003年の政権転覆後においていかに継承されたのか。次章では、2003年以前「フセイン政権の犠牲者」であったイスラーム主義組織、クルド民族主義組織が、戦後政権の担い手となったことで、インティファダの記憶が戦後政権の統治の正統性を付与するものとなった点に着目する。

第3章 イラク戦争後にいかにインティファダの記憶が再生されているか

第1節 政府側のインティファダ認識

2003年、米軍を中心とした「有志連合軍」のイラクへの軍事攻撃によってフセイン政権は倒れ、米軍の指導のもとに旧政権関係者のパージ、旧国軍・与党バアス党の解体(2003年)、民選に基づき選出される国会および地方議会の設立(2005年)、新憲法の成立と、戦後新体制が確立されていった。その結果、2003年までに主として在外に活動拠点を置いていたシーア派イスラーム主義政党およびクルド諸政党が多数派を獲得して与党となった。一方、旧体制下の政治エリートの多くを占めていたスンナ派住民が戦後体制から排除されたことで、スンナ派社会で反政府、反米活動が激化し、戦後の治安悪化の原因となった。

こうしたなかで、新政権にとってのインティファダの記憶は、どのように継承されたのだろうか。新政権の構成を見れば、反フセイン蜂起として「下から」の運動として記憶されたインティファダが、戦後は「上」=戦後政権によって担われる公的記憶に転換されたといえる。与党諸勢力は、シーア派であれクルド民族であれいずれも、旧政権下で反政府活動を展開したことで旧政権の「最大の犠牲者」であったことを戦後支配の正統性とするため、インティファダを利用したからである。インティファダは、戦前の「下」からの運動であったがゆえに戦後「上」となりえるものであり、よって新政権はインティファダの記憶を繰り返し再生し、再解釈し、それぞれ権力基盤を強化するための諸行為を、定例化、公式化した。

その最も顕著な試みが、インティファダ記念行事の公的な実施である。インティファダが起きた3月には、中央政府はむろんのこと、地方や宗教界でもさまざまな記念行事が実施され、政府、党の要人が記念演説を行っている。そこではインティファダへの参加が自動的に戦後の権力を約束することが前提とされているといえよう。クルディスタン自治政府において、政党間関係が緊張するたびに、インティファダへの関与の有無を取

り上げて政敵の支配の正統性の欠落を示唆する演説が増加しているのは、インティファダがいかに戦後権力保持の正統化に利用されているかを示す事象である⁹。実際にインティファダに参加した者がそのまま新政権の中心となるケースも、少なくない。クルディスタン自治政府における PUK および KDP の軍事部門ペシュメルガは、その代表的な例であろう。シーア派イスラーム主義勢力のなかでも、当時 SCIRI 軍事部門と位置付けられていたバドル機構 (Munazzama al-Badr) もまた、インティファダへの直接、間接の関与経験がある。さらには、ムハンマダーウィー ('Abd al-Karīm Muḥammadawī) のように、「湿地帯の王子」と呼ばれてインティファダで活躍した経験をもとに、戦後の移行政府 (2005 年 5 月-) で大臣登用された例もある。

インティファダが争点となるのは、旧政権派に対する戦争犯罪を問う裁判においても同様である。戦争犯罪事由として、インティファダ鎮圧に加担したことがしばしば取り上げられている。さらにはインティファダ鎮圧時に殺害され大量に遺棄された遺体が埋められた集団墓地を発掘することも、国策として繰り返し進められている¹⁰。

第2節 地方政党に表象されるインティファダ

(1) 地方議会における「インティファダ政党」

このように、インティファダへの参加・支持が戦後政権の正統な統治の試金石として扱われたことは、ダアワ党や SCIRI など政権与党によって形成される戦後政治エリート層の外に位置する勢力の間に、インティファダへの参加経験を以て戦後政治エリート層への参入可能であるとの認識を生んだものと考えられる。

2005 年 1 月に、初めての自由な民主的選挙と謳われた憲法制定議会選挙が実施されたが、同時に統一地方議会選挙も実施された。国政選挙においては、上述した政権与党を中心に選挙連合が形成され、中小規模、あるいは地方政党の単独での立候補はわずかであった。

⁹ たとえば 2008 年のインティファダ記念では反 KDP(クルディスタン民主党)系の諸メディアで、KDP や PUK (クルディスタン愛国同盟) などの自治政府与党が十分な社会サービスを住民に提供できなかったことで、インティファダを失敗に貶めた、といった論調や (Kirkuk, 10 March 2008)、クルディスタン与党がインティファダ後民衆から遊離したためクルディスタンにもイスラーム主義勢力が台頭することになった、といった論調 (Levin, 21 October, 2008) が見られる一方で、新たに台頭したクルド政党「ゴラン(Gorran)」の指導者に対して、インティファダに貢献していないことを理由にこれを貶めるような論調が PUK 機関紙に見られる (Kurdistan Nuwe, 7 December, 2007)。

¹⁰ "Iraq uncovers 'Saddam Hussein-era' grave of 800 bodies", *BBC News*, 15 April 2011
<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-13094677>

しかし地方議会選挙においては、特に2005年段階では多くの県で、地方ごとに独自の政党が結成され、政権党とは別に候補者を立てることが一般的であった。

そこで、いくつかの県において、「インティファード」の名を冠した6つの政党（インティファード政党と呼ぶ）が立候補者を出したのである。4政党が南部の複数県（最低でも5県、最大で8県）と首都バグダードで候補者を立てたが、その4政党とは、「イラクにおける1991年シャアバーン¹¹・インティファード・ブロック (Kutla Intifāda al-‘Irāq al-Sha‘bāniya fi Āmm 1991、以下「ブロック）」、「シャアバーン・インティファード革命派運動 (Ḥaraka Thuwwār al-Intifāda al-Sha‘bāniya、以下「革命派）」、「イラク・インティファード集団 (Tajamma’ al- Intifāda al-‘Irāqiya、以下「集団）」、「シャアバーン月15日イスラーム運動 (Ḥaraka 15 al-Sha‘bāniya Islāmīya、以下「シャアバーン15」)」である。それ以外にも、バスラ県のみで「インティファード革命派のための民主運動 (al-Ḥaraka al-Dimuqrāṭīya li Thuwwār al-Intifāda)」が、バービル県で「インティファード殉教者のための希望協会 (Jam‘īya ‘Amal li Shuhadā al-Intifāda)」が立候補した（詳細は末尾附表を参照）。

しかしながら、これらの政党のいずれも議席を獲得することはできなかった。そのため、2009年の統一地方議会選挙で候補者を立てた政党は4つに減少した。2005年選挙ですべての南部県で候補者を立てた「シャアバーン15」は、その後姿を消している。後述するように、2013年選挙までには多くのインティファード政党は「ブロック」に統合され、2005年から継続して候補者を立てた政党は「ブロック」のみとなった。2013年選挙のみ候補者を立てた政党のうち2政党は、首都でしか候補者を擁立しておらず、もともとインティファードの舞台であった南部県では、インティファードの名前を冠した政党の多くが地方議会から姿を消したといえよう。

(2) 地方政党と中央政権党との関係

さて、南部諸県のインティファード政党が地方議会から姿を消した背景に、中央政権与党である国政政党との関係を見無視することはできない。最大の政権与党であるシーア派イスラーム主義政党は、ダアワ党と SCIRI¹²、およびサドル潮流 (Tayyār al-Ṣadr) であるが、

¹¹ シャアバーン Sha‘bān とはイスラーム暦の月の名前で、インティファードが発生した月（発生日は15日）を意味している。以下で「インティファード」の名前を冠していなくても、「シャアバーン」あるいは「シャアバーン15」との名前がある政党は、インティファードを意味するものとしてここにカウントする。

¹² SCIRI は、2007年6月にその名称をイラク・イスラーム最高評議会 (ISCI) と改名したが、ここでは混乱を避けるため、SCIRI の名称を使用する。

サドル潮流を除けば、フセイン政権時代に海外に活動拠点を置いていた亡命政党である。SCIRI傘下であったバドル組織や、ダアワ党の一部の分派組織のように、フセイン政権時代にも国内に一定の基盤を以てインテリファードダに關与していたものも存在したが、基本的にこれらの亡命政党は、イラン戦争直後はイラク国内での政権基盤の脆弱さを弱点としていた。このことは特に、海外亡命経験がなく国内支持基盤が盤石なサドル潮流の戦後の急速な勢力拡大と比較すると、対照的であった。

このようにみれば、国内支持基盤の拡大、定着を求めるダアワ党、SCIRIが、上記の南部県で多くの候補者擁立ができる地方インテリファードダ政党との協力関係を追求したとしても不思議ではない。そのため、2009年の地方議会選挙では、上記中央政権与党はいずれも地方への浸透に力を入れた。特に2005年選挙ではSCIRIの全県での獲得議席数(195議席)の4分の1しか議席を得られなかったダアワ党(42議席)は、大いに巻き返しを図る必要があったのである。

その結果、2005年の選挙結果とは対照的に、2009年選挙では中央政権与党が南部各県で勝利をおさめた。中央政権で首相ポストを歴任するダアワ党が、2005年選挙で最大の議席数を獲得したSCIRIに変わり、ダアワ党系選挙連合の獲得議席数(126議席)がSCIRI系選挙連合(56議席)の倍以上となったのである。また、中央政権党のなかでも、比較的支持基盤に地方色の強いファディーラ(Faḍīla)党は、2005年選挙から大幅に議席を失った(49議席から6議席)。こうして、地方における政党勢力図は中央のそれがほとんど重なる結果となったのである。

この時のダアワ党の地方政党吸収方針の対象となった地方政党に、インテリファードダ政党がある。とりわけ、「ブロック」は2009年選挙でダアワ党系の選挙連合である法治国家連盟(I'tilāf Dawla al-Qānūn)に参画した¹³。興味深いのは「ブロック」が法治国家連盟に加わる以前からも、中央政権党ないし中央に影響力を持つ諸勢力と頻繁に接触していたことである。2004年にはチャラビ(Aḥmad al-Chalabi)率いるシーア派評議会に一時的に参加しており、また2011年にはアッラーウィ('Iyād 'Allawī)率いる政党ウィファーク(al-wifāq al-waṭanī)への誘いがあったと報道されている¹⁴。このように、さまざまな国政政党からの誘いを受けながら、2012年には他のインテリファードダ政党を「ブロック」に統合し¹⁵、次回選

¹³ “Qā'ima I'tilāf Dawla al-Qānūn”, *Niqāsh*, Jan. 28, 2009
<http://www.niqash.org/ar/articles/politics/2362/>

¹⁴ *Al-Sūmaria TV*, Sept. 23, 2011. <https://goo.gl/Vj2nSJ>

¹⁵ *Al-Sūmaria News*, Sept. 18, 2012. <https://goo.gl/K4bjFj>

挙において法治国家連盟参加で候補者を立てることが決定されたのである。ここに、ダアワ党による地方インティファーダ政党の吸収が完成したといえよう。一方で、インティファーダ戦士集団 (tajamma‘ al-Mujāhidī al-Intifāda) は2012年3月に SCIRI 系の選挙連合ミブラブ(Mihrāb)・リストに参加したと報じられている¹⁶。

こうして、南部諸県に活動基盤を持つインティファーダ政党は、2013年までには中央政権の与党を務めるシーア派イスラーム主義政党に吸収され、地方社会と国政を橋渡しする存在となった。

第4章 「イスラーム国」出現後のインティファーダの記憶の動員

第1節 「イスラーム国」に対する戦いと PMU の役割

以上で見てきたようなインティファーダ政党の中央政権与党のエージェント化は、2014年の「イスラーム国」の登場によって一層拍車がかかった。中央からのインティファーダ政党の再編、組織化への介入も一層強まり、2015年3月にダアワ党の指導で新たに「シャアバーン・インティファーダ・イラクの呼びかけブロック(al-Intifāda al-Sha‘bāniya Kutla Nidā al-‘Irāq)」が結成され、同年聖地カルバラでのインティファーダ記念式典に中央政府から要人を招いたことは、そうした中央主導性を表している¹⁷。

これは、上記国政政党の国内基盤の欠落という初期の要因に加えて、ダアワ党、SCIRI など主要政党が内部で派閥対立、分裂傾向に陥り、党内自派勢力強化のために地方政党たるインティファーダ政党への介入を強めたという側面もある¹⁸。2014年以降に強まった国政政党のインティファーダ政党への干渉は、インティファーダの記憶がシンボルとして果たす役割にいかなる変質をもたらしたのだろうか。

¹⁶ *Bilad News*, March 27, 2012, biladnews.net/permalink/3638.html.

¹⁷ 同記念式典には、ダアワ党からアディーブ(‘Alī al-Adīb)高等教育相が出席した。*Karbala Khabar*, 27 March, 2015(<https://goo.gl/yXQXwZ>)。また、2015年3月7日付 *Iraq News Network* は(<https://goo.gl/jgND8p>)、「呼びかけブロック」を「ただダアワ党のマーリキー派閥を言い換えただけのもの」と批判している。

¹⁸ 2010年に首相に再選されたマーリキー(Nūrī al-Mālikī)はダアワ党内部で独自の支持基盤を確立し、イランと密接な関係を確立した。その後2012年に ISCI (SCIRI が名称変更したもの) から分派し政党として独立したバドル組織を取り込み、2014年の国政選挙ではバドル組織はマーリキーのダアワ党とともに「法治国家連盟」として参加した。同様にサドル潮流の軍事部門であったアサーイブ・アフル・アルハック(‘Aṣā’ib Ahl al-Ḥaqq, AAH) もまたサドル潮流から独立し、マーリキーの派閥に合流した。

前述したように、「イスラーム国」の露骨なシーア派に対する異教徒視は、イラクのシーア派社会全体の存続を脅かす深刻な危機と認識された。シーア派宗教界は、「イスラーム国」のモースル侵攻から4日後の金曜礼拝で、国民に「祖国と国民、聖なる土地を守るために武器をとってテロリストと戦う」ことを呼びかけ、「この聖なる目的を実現するために志願し治安部隊に加わる」よう促した¹⁹。その結果、人民動員機構（al-Ḥashd al-Sha‘bī, 以下、英語名称 Popular Mobilisation Units から PMU と略²⁰）が結成され、対「イスラーム国」軍事作戦に参加するために多くの義勇兵が集まった。

PMU 自体、複数の組織、派閥によって構成されているが（Aladdin 2017; Mansour and Jabar 2017）²¹、PMU 司令官にはバドル組織の長アーミリー（Hādī al-‘Āmirī）が、副司令官にはダアワ党のムハンディス（Abū Mahdī Muḥannḍis）がついた。イラン亡命期間が長くイラクと密接な関係を持つバドル組織が主導する勢力が中心であること、その軍事指導にイラク革命防衛隊が積極的に関与し、クドゥス（Quds）部隊司令官であるカーシム・スレイマーニ（Qāsim Sulaymānī）が頻繁にイラクで指揮をとっている姿が繰り返し公にされていることなどから、PMU におけるイランの影響力がしばしば指摘されている。

特にアラブ・メディアや欧米の論調は、PMU の役割増大をイランの地域覇権拡大の議論につなげて、イラク脅威論を声高に喧伝しがちである²²。本稿が注目するのは、こうしたイラク周辺のアラブ諸国、トルコなどで展開される宗派主義化、宗派の安全保障化傾向に対して、イラク国内社会の宗派主義は連動するのか否か、という点である。中東域内で定着しつつある政治の宗派主義化という認識は、「存亡の危機」が最も強く感じられているイラク国内ではより一層強いといえるのだろうか。

PMU が宗派主義の産物であるという周辺国での議論に対して、Haddad (2018) は、PMU に対する民衆的支持を認識していないとして反論し、インティファダがそうだったように PMU がイラク社会の象徴として機能していることを指摘している。シーア派聖地や南部

¹⁹ シーア派最高権威アリー・シスターニ（‘Alī al-Sīstīnī）代理人のアブドゥル・マフディー・カルバライー（‘Abd al-Mahdī al-Karbalā’ī）による金曜礼拝。
<https://www.sistani.org/arabic/in-news/24908/>

²⁰ Popular Mobilisation Forces と英訳され PMF と略される場合も多い。

²¹ PMU の兵士数については、Mansour and Jabar (2017) によれば、60000 人から 142000 人と、多様な情報があり、また傘下の組織数も 50 ほど存在する。

²² 2014 年以降、サウディアラビアや UAE などの資本によるアラブ・メディアは頻繁に、対「イスラーム国」戦闘の過程で PMU が過度にシーア派色の強い行動を取って宗派对立を惹起していることや、解放時の軍事作戦でスンナ派住民に虐待をしていること、イランの脅威を強調した論陣を張った。酒井（2017）参照。

地域はむろんのこと、バグダードにおいても PMU への動員を呼びかけるポスターや案内、寄付を呼び掛ける募金箱は各地に多数散見され、PMU 義勇兵を追悼する看板や旗などが路上に大きく掲げられるなど、PMU 兵士への社会的尊敬は高いことが見て取れる²³。

以下では、PMU に関する国内のナラティブを分析することで、それがいかに社会的に位置づけられているか、見てみよう。

第2節 PMU とインティファードの連続性

(1) 法治国家連盟主導のインティファード政党と PMU の接合

イラク国内で PMU の祖国防衛の役割がいかに位置付けられているかを見るために、PMU とインティファードの記憶の再生が関連しているという現象に光を当ててみたい。2014 年の「イスラーム国」の侵攻を契機として、PMU とインティファードとの連続性を強調する傾向が強まっているからである。その連続性は、以下の2つの側面で強調されている。ひとつは両者を並列、連続したナショナルな事業であることを強調する論調（ナラティブ）の確立であり、もうひとつは人的連続性である。

前者については、上述したダアワ党系新党「シャアバーン・インティファード・イラクの呼びかけブロック」の長であるサアディ(Talib al-Sa'di)の、「今年(2015年)のインティファード記念日は以前のものとは異なる。それは戦いの前線が再び戻ってきたからだ」との発言に、如実に示されている²⁴。そこで見て取れるのは、2009年以來続いてきたダアワ党／法治国家連盟によるインティファード政党の再編、取り込みの試みが加速していること、2014年6月以降は同党による PMU の役割強調をインティファード政党が中心となって行っており、マーリキーとバドル組織が共闘した法治国家連盟が中心となって、PMU とインティファードの連続性というナラティブが作り上げられている、ということである。

2つ目の強調点である人的連続性においても、ダアワ党の主導的役割が目立つ。例えば、2015年3月のティクリート作戦において中心的な役割を果たした PMU の「怒りの大隊(katā'ib al-ghadab)」を率いるシャンマリー(Abū Faqqār al-Shammarī)は²⁵、ダアワ党国内組

²³ 筆者のバスラ(2015年12月)、カルバラ、ナジャフ(2017年1月)、バグダード(同10月)視察時の観察による。

²⁴ *Karbala Khabar*, 27, Mar. 2015.(注16参照)

²⁵ 「怒りの大隊」公式フェイスブックによる。<https://www.facebook.com/kataa7b/>。また、その背景や思想傾向については、Aymenn Jawad Al-Tamimi の HP に詳しい。<http://www.aymennjawad.org/15576/kataib-al-ghadab-an-armed-wing-of-the-islamic> さらには Duman and Sonmez (2018:175) も参照。

織 (tanẓīm dāhīrī) 軍事部門のメンバーであり、上記「ブロック」の政治局 (ha'ia al-siyāsiya kutla al-intifāda) の長として活躍していた²⁶。

ただし、ここで注目しなければならないのは、法治国家連盟系のインティファダ政党に限らず、シーア派イスラーム主義を掲げるさまざまな政党はいずれもインティファダと PMU の接続を意識した発言を行っていることである。1990 年代から国内活動基盤を持つファディーラ党が「PMU の勝利はインティファダの勝利に他ならない」と述べているのは、その一例であろう²⁷。

(2) PMU 公的ナラティブとしての「インティファダの延長」と社会への浸透

インティファダと PMU を延長線上に置く認識枠組みは、PMU 自体の公的ナラティブとして社会に向けて広く発信されている。2016 年 5 月 23 日、ファッルージャ作戦において PMU のアサディ (Aḥmad al-Asadī) 広報官は、その勝利をインティファダと結び付けた声明を行った²⁸。そして、インティファダの歴史的記憶が再生される機会の度に、このナラティブが繰り返されるメカニズム (レパトリー化) が、社会レベルで構築されている。インティファダを記念する諸行事で掲げられるスローガンはその一例で、2015 年 3 月には「PMU の男たちは 3 月インティファダの延長線上にある」²⁹、2017 年には「インティファダで流した血は聖なる PMU (の行動) のなかに結実した」というように、PMU がインティファダの継承者であるとしてこれを讃えたスローガンが頻出した³⁰。

PMU とインティファダを結び付けるナラティブの社会への浸透、レパトリー化に重要な役割を果たすのが、シーア派宗教施設である。カルバラではインティファダを記念する行事がさまざまに実施されているが、2017 年 3 月にフサイン廟が始めて第一回インティファダ記念式典を主催し³¹、同廟思想担当事務局長補のシャーミー (Aḥḍar al-Shāmī) が、インティファダがイラク民衆史の一部であること、宗教界と結びつき、また PMU の

²⁶ *Sahifa al-Haqiqiya fil-Iraq*, 15 Jan. 2013 による。

<http://www.factiniraq.com/mod.php?mod=news&modfile=item&itemid=11859#.Wru-xIjFI2w>

²⁷ ファディーラ党公式サイトによる、2016 年 6 月 6 日報道。 <https://goo.gl/pcFpUw>

²⁸ 2016 年 5 月 23 日付 PMU 公式サイトより。

http://hshed.com/wp-content/uploads/2016/05/13256529_612802188870064_1072613023434623927_n.jpg?x85679

²⁹ *Karbala Khabar*, 27, Mar. 2015(注 16 参照)

³⁰ *Shafaqna*, 7, Mar. 2017. <http://iraq.shafaqna.com/AR/69372>

³¹ フサイン廟のみならず、カルバラのアッパース廟もまた、2017 年以降競うようにしてインティファダ記念式典の大規模化、公式化を進めている様子が顕著である。

勝利へと続いていると強調する演説を行った³²。そこでは PMU を讃える詩の朗詠や文芸活動が行われており、宗教施設と文化活動という一般社会に身近な空間で、インティファーダと PMU の接続が展開されていることを示している。2017 年後半にも同様の文化事業がカルバラの聖廟組織と協力して実施されており、11 月に同地で行われたブックフェアでは、イラク治安部隊や PMU の勇猛果敢さを讃えた文芸作品が多く出典された。これはダアワ党系の「呼びかけブロック」カルバラ支部と聖廟組織が共催して、フサイン廟とアッバース廟 (ataba al-'abbāsīya) の間の広場で実施されたものである³³。

ここに、インティファーダと PMU の連続性の強調が、中央政権党から地方政党、ひいては地域社会へと「上／国家」から「下／路上」へのベクトルで操作されているばかりではなく、宗教界と地方インティファーダ政党間の水平的な協力関係のもと、社会のなかで PMU を、インティファーダから続く歴史的な英雄列伝に位置付けようという社会的、文化的な試みが繰り返し展開されていることを見て取れる。

(3) 祖国性の強調

さらに PMU は、同じく超宗派的で一国ナショナリズムのシンボルとして歴史的に認識されてきた 1920 年暴動をも、PMU に続く連続性のなかに位置付ける³⁴。インティファーダと PMU は宗教施設という空間によって結節されるが、1920 年暴動との結節点とされるのが、部族社会である。2017 年 3 月 31 日、アサディはバグダードで南部に基盤を持つバニー・アサド (Banī Asad) 部族連合の集会で演説を行ない、PMU に対する部族の犠牲を高く評価した³⁵。

以上から、2014 年 6 月以降の「イスラーム国」侵攻というイラク国家存亡の危機、それに対応して PMU の組織化という展開を経て、インティファーダという歴史的シンボルがもつ政治性が大きく変化したことがわかる。PMU の出現とともにインティファーダ政党は、PMU の背景にある国政政党と連携しつつ、宗教施設などを舞台に地方社会での日常行事に関与することで、垂直方向での結節点となるとともに社会の水平的な接続点としても機能することとなった。社会に根差したインティファーダの記憶は、PMU の祖国防衛組織としての存在を正当化し、その社会的評価の高さを説明するために参照するのに最適だったか

³² *Abna* 24, 7 Mar. 2017. <https://goo.gl/xJ5uKL>

³³ 2017 年 11 月 29 日付 *Nahnu al-Khabar* 報道による。両廟の間の広場は、カルバラ最大の行事であるアーシューラーなどで行進が発する、シーア派社会にとって極めて重要な意味を持つ空間である。

³⁴ ファッルージャ作戦時の PMU 広報官アフマド・アサディの声明。注 24 参照。

³⁵ <https://goo.gl/gKWp44>

らである。イラク全土にわたる反政府蜂起であったインティファダと PMU の対「イスラーム国」軍事作戦が同じ「祖国防衛活動」であると位置づけることによって、ともすれば特定宗派、特定地域の利害を反映しているものとみなされがちな PMU に（酒井 2017）、より「祖国性」を付与するナラティブが一般化したのである。

第3節 「脱宗派主義」化の試みと「静かな宗派主義化」の進行

（1）脱宗派主義化のための「インティファダ」記憶の動員

以上から明らかになったことは、次のとおりである。「イスラーム国」に対する戦いで主軸となった PMU も、それを支える法治国家連盟（マーリキー派）も、域内に宗派主義的な安全保障化が進むのに抗するかたちで、イランとの関係や PMU 構成員の宗派偏向性を相殺するように PMU を「脱宗派主義化」し、その祖国性を強調することに力点をおいた。

そのために、PMU こそがインティファダの延長である、との論理を立てて、インティファダの全国的な反政府蜂起というナショナルなシンボルと PMU の活動を重ね合わせようとしている。そして「PMU=インティファダ」との認識が、単に PMU を抱える政権与党によって「上/国家」から地方社会=下へと操作されるだけではなく、宗教施設という空間を舞台とし文化活動を通じて広く社会に発信されていることを見て取ることができた。宗教界、インティファダ関係者、PMU、そして中央政権党が交差する、「上/国家」と「下/路上」との相互作用を通じて、「PMU=インティファダ」の認識は人々の日常社会に浸透しつつあるが、そのことこそが、住民の PMU に対する圧倒的な支持という各種世論調査結果に如実に現れている³⁶。

（2）「インティファダ」の再解釈：地理的縮小

だが、こうした「脱宗派主義化」の試みによって、PMU など対「イスラーム国」軍事作戦を戦ったものたちは、果たして「祖国性」を代表するものへと転換、昇華されうるのだろうか。

ここで着目したいのは、祖国防衛のシンボルとして援用されたはずのインティファダの記憶自体が、「上」=政権与党のスタンスに呼応して、改めて解釈され直していることである。前述した通り、インティファダの意味、解釈については、発生直後から世俗左派

³⁶ Greenberg Quinlan Rosner Research によるサーベイ”Lack of Responsiveness Impacts Mood August – September 2015 Survey Findings”による。
https://www.ndi.org/sites/default/files/August%202015%20Survey_NDI%20Website.pdf

系とシーア派イスラーム主義系の政党では認識が異なっていた。シーア派イスラーム主義政党のなかにはイラン革命との同質性を強調するものもいれば、反対にイラク共産党は宗派に限定しないナショナルな蜂起と主張していた。宗派偏向的解釈に陥らないよう、インティファードの発生が南部でもスンナ派居住地域であるズベイルだったことや、モースルやアンバールなど住民のほとんどがスンナ派である県でも発生したという史実は、インティファードを脱宗派主義化しナショナルなものとして位置づけるためのナラティブのなかで、しばしば強調された (al-Halafi 2017:164)。

2014年以降も、インティファードの祖国性を担保する脱宗派主義志向は強調され続けた。だが、ここで重要なことはその解釈のあり方に変化が見られることである。

第一は、インティファード発生地域についての地理的認識の変化である。上述したように、インティファード直後のナラティブにおいては、蜂起発生地域は主として北部のクルディスタンと南部シーア派地域ではあるが、スンナ派住民の一部もそれに加わったとされ、宗派限定的な蜂起ではないことの根拠とされていた。2014年以降もそうした論調がないわけではないが、シーア派地域に限定した発生だったとの認識が強化されていることは、イラク国内のウェブ紙 *Kitabat* が掲載する論評で「インティファードはラマーディ、モースル、ティクリート以外の地で発生した」と論じられていることを見れば、わかる。本記事が掲載された2015年3月5日という日付は、まさにラマーディ、ティクリートに対するPMU中心の対「イスラーム国」軍事作戦が展開されていた時期であり、ここに「インティファード参加者＝南部シーア派地域居住のシーア派＝反フセイン政権」対「インティファードに参加しなかった者＝フセイン政権支持派＝ラマーディ、モースル、ティクリート＝「イスラーム国」制圧下地域」との「友・敵構造」を見ることができる。

さらに、「イスラーム国」侵攻前ではあるが、すでに西部アンバール県での反政府活動の激化を危険視していたマーリキー政権下でアディブ高等教育相が、インティファードがシーア派中心で発生したことを公言し、当時発生していた反政府運動が、「特定の県出身の者が前政権下で治安や政治、貿易を独占していた」がゆえにそれらの地域の住民が「特権を失ったように感じて」いる、と発言している³⁷。ここでは、2014年6月以降に「法治国家連盟」とPMUが展開する、インティファードが象徴する祖国性からスンナ派地域を地理的に脱落させたインティファード解釈の原型を見ることができる。

³⁷ *Al-Sharq al-Awsat* (サウディ資本汎アラブ紙)によるインタビュー。March. 31, 2013

(3) 誰が犠牲者か：「静かな宗派主義化」

第二の変化は、インティファダが象徴する犠牲者認識の曖昧化である。先に述べたように、インティファダの記憶は基本的に前政権の圧政の犠牲者としての記憶として、戦後政権の統治の正統性を支えてきた。インティファダでは、集団墓地の発掘や戦争犯罪者の処罰にみられるように、誰が前政権の犠牲者となったかが、誰が前政権と戦ったかよりもナショナルな共通の記憶として再生されてきたのである。それに対して、PMU は誰が「イスラーム国」と戦ったか、戦闘での英雄性がより重視される。PMU とインティファダが重ね合わせられることで、後者が持つシンボルとしての意味から犠牲者性が薄れ、換わって「敵」に対する戦闘を正統化する作用へと転換することになる。

そこで問題となるのが、PMU が「イスラーム国」と戦った殉教者を代表するものとはななりえても、「イスラーム国」に支配され生活を破壊された犠牲者を代表するものには、少なくとも現時点ではなりえていないし、それを抱合する連帯の論理も持ち得ていないという点であろう。それがインティファダと PMU との最大の相違点である。そして、戦わなかった犠牲者の多くが、キリスト教徒であり、スンナ派イスラーム教徒である。

約言すれば、祖国性の象徴とされたインティファダのシンボルとしての意味自体が変質していることは、ナショナル化＝脱宗派主義化を進めながらも実際には「静かな宗派主義化」が進行していることを意味しているといえよう。

終わりに

最後に、本稿冒頭で掲げた問題提起を振り返ってみたい。本稿は、宗派主義の出現について、「上／国家」からの安全保障化によって「敵」が特定宗派と措定され、宗派对立ではなかった政治対立が宗派を巡る対立に転化されていく、との議論を踏まえて、その「上からの」作用を社会がいかにかに受容、あるいは拒絶するかを見ることを目的とした。そのため、露骨なシーア派排斥を掲げる「イスラーム国」の台頭に対して、イラク政府およびイラク社会がいかにかにこれを「存亡の危機」ととらえ、いかにかに安全保障化のメカニズムを起動させたかに着目した。

宗派主義の安全保障化が、イラクとその周辺で起きていたことは確かである。冒頭であげた先行研究では（酒井 2015）、2006-7年のイラク内戦の過程で「敵」が宗派差別的な民兵でありイランと同一視可能なものとして、宗派の差異が安全保障化されていく過程が示され、また酒井（2017）は、周辺国、特にアラブとトルコのメディアがイラン脅威論の高ま

りを反映してシーア派の台頭に対する警戒的論調を展開し、宗派の安全保障化に拍車をかけていたことを明らかにした。

2014年6月以降は、「イスラーム国」侵攻の脅威によって、安全保障化が進み宗派主義が進行することが容易に想像された。実際、シーア派を明示的に異教徒視する「イスラーム国」からの防衛必要性から「シーア派性」が強く浮き出、祖国防衛を呼びかけたシーア派宗教界の声明がシーア派住民や政権与党所属の民兵の動員のみにはしか効果を持たなかったという宗派偏向性が、無視できないものとなった。

だが、わかりやすい中東域内メディアの宗派安全保障化論に対して、イラク国内で展開された政策、論調は、むしろ対「イスラーム国」軍事作戦の見た目の宗派偏向性を糊塗しようとするものであった。中東地域に広く流布した宗派対立観を相殺するために模索されたのは、脱宗派主義化であった。

そこで、対「イスラーム国」祖国防衛戦争を脱宗派的、国民統合を反映したものとするために援用されたのが、イラクの超宗派的な一体性のシンボルとしてのインティファードである。対「イスラーム国」軍事作戦において中心的な役割を果たすPMUを、インティファードの再生と解釈し両者を接続することで、対「イスラーム国」軍事作戦を祖国防衛戦争とし、脱宗派的なものとしようとしたのである。

しかしPMUとインティファードの接合は、前者が後者の祖国性を帯びて脱宗派化に成功するというよりは、むしろ前者の宗派的地域限定性、敵への戦闘性の強調が後者の記憶を変質させる結果をもたらしている。「上／国家」からの「脱宗派主義の試み」のなかに、わずかなナラティブの変更を通じて、「静かな宗派主義」が潜まされているといえよう。

アバーディ首相が「イスラーム国」との戦いの終了を宣言して、未だ半年も経ていない現在、「脱宗派主義」が本格化するのか、それとも「静かな宗派主義」が社会に浸透し、祖国性の原型となりうる歴史的記憶が変質を余儀なくされることになるのか、未だ不明である。それは、今後の「祖国再建」が、いかなるナラティブのもとに展開されるかに大きく左右されることになろう。

附表

政党名	選挙（年）			候補者を出した県	備考
	05	09	13		
1991年イラク・シャアバーン・インティファーダ・ブロック	○	○	○	(2005年)バービル、バグダード、カルバラ、マイサン、ディーカール、ワーシト(2013年)カーディスィーヤ	2009年、法治国家連盟に参加
シャアバーン・インティファーダ革命派運動	○	○	-	(2005) バービル、バグダード、バスラ、カルバラ、マイサン、ディーカール、カーディスィーヤ	2007年、事務局長殺害される
イラク・インティファーダ集団	○	○	-	(2005) バグダード、バスラ、カルバラ、ムサンナ、ナジャフ、カーディスィーヤ	
シャアバーン月15日イスラーム運動	○	-	-	(2005) バグダード、バスラ、カルバラ、ムサンナ、ナジャフ、カーディスィーヤ、ディーカール、ワーシト	
インティファーダ革命派のための民主運動	○	-	-	(2005) バスラ	
インティファーダ殉教者のための希望協会	○	-	-	(2005) バービル	
人民のためのインティファーダ潮流(tayyār al-intifāda lil-jamāhīr)	-	○			
イラク・インティファーダ勢力同盟(tahāluf qiwā al-intifāda fil-‘irāq)	-	-	○	(2013) バグダード(ルサーファ地区)	
偉大なるシャアバーン・インティファーダ (al-intifāda al-sha‘bānīya al-mubāraka)	-	-	○	(2013) バグダード(カルフ地区)	2018年選挙に立候補予定

参考文献

- Abdo, Geneive 2016. *The New Sectarianism: The Arab Uprisings and the Rebirth of the Shi'a-Sunni Divide*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- ‘Abd al-Jabar, Falih 2000. “al-intifāda al-‘irāqīya ba‘d tis’ sanāwāt: bayna al-nisyān wal-dhākira”, *al-Thaqāfa al-Jadīda*, No. 295, July-August, pp. 94-99
- Aladdin, Ranj, 2017. “Containing Shiite Militias: the battle for stability in Iraq”, *Brookings Doha Center Policy Briefing*. Brookings Institute
https://www.brookings.edu/wp-content/uploads/2017/12/12_17_shiite_militias_in_iraq.pdf
- Al-Halafī, Jāsīm, *al-Harakāt al-ijtimā‘īya fīl ‘irāq: al-jadwar, al-maṣārāt, al-dawr al-siyāsī*, Baghdad: Dār Suṭūr
- Al-Mājid, Mājid 1991. *Intifāda: al-sha‘b al-‘irāqī 1991/1416*, Bayrūt: Dār al-wifāq
- Al-Ujuli, Shumran 2000. *Al-Khāriṭa al-siyāsīya lil-mu‘āraḍa al-‘irāqīya*, London: Dār al-ḥikma
- Cerf, Christopher 2003. *The Iraq War Reader: History, documents, opinions*, Touchstone book: NY
- Davis, Eric 2010. “Introduction: The Question of Sectarian Identities in Iraq,” *International Journal of Contemporary Iraqi Studies*, Vol. 4, No. 33, pp. 229-242.
- Dixon, Paul 2017. “Beyond Sectarianism in the Middle East? Comparative Perspectives on Group Conflict”, Frederic Wehrey ed., *Beyond Sunni and Shia: The Roots of Sectarianism in a Changing Middle East*, Oxford and New York: Oxford University Press
- Dodge, Toby 2007. “State Collapse and the Rise of Identity Politics,” Markus E. Bouillon, David M. Malone, and Ben Rowswell, eds., *Iraq: Preventing a New Generation of Conflict*. Boulder, CO: Lynne Rienner
- Duman, Bilgay and Goktug Sonmez 2018. “An Influential Non-state Armed Actor in the Iraqi Context: al-Hashd Al-Shaabi and the Implications of its Rising Influence”, Yesiltas, Murat and Tuncay Kardas ed. *Non-state Armed Actors in the Middle East: Geopolitics, Ideology, and Strategy*, Cham:Palgrave
- European Parliament, Directorate General for External Policies, Policy Department, *Workshop Sectarianism in the Middle East*, 15-20,
[http://www.europarl.europa.eu/RegData/etudes/IDAN/2017/603843/EXPO_IDA\(2017\)603843_EN.pdf](http://www.europarl.europa.eu/RegData/etudes/IDAN/2017/603843/EXPO_IDA(2017)603843_EN.pdf)
- Gause, Gregory 2014. “Beyond Sectarianism: The New Middle East Cold War”, Brookings Doha

Center, July 22,

<https://www.brookings.edu/research/beyond-sectarianism-the-new-middle-east-cold-war/>

Haddad, Fanar 2011. *Sectarianism in Iraq: Antagonistic Visions of Unity*. London: Hurst.

————— 2013. “Sectarian Relations in Arab Iraq: Contextualising the Civil War of 2006–2007,” *British Journal of Middle Eastern Studies*, Vol. 40, No. 2, pp. 115-138.

————— 2017. “Sectarianism and Its Discontents in the Study of the Middle East,” *The Middle East Journal*, No. 3 (Summer), pp. 363-382.

————— 2018. “Understanding Iraq’s Hashd al-Sha’bi: State and Power in Post-2014 Iraq”, The Century Foundation, March 5

Hashimi, Nader and Danny Postel eds. 2017. *Sectarianization: Mapping the New Politics of the Middle East*. Oxford and New York: Oxford University Press

Hilli, Walid 1992. *Al-‘irāq: al-waqā’i wa āfāq al-mustaqbal*, Bayrūt: Dār al-furāt

Hinnebusch, Raymond 2016. “Sectarian Revolution in the Middle East,” *Revolutions: Global Trends and Regional Issues*, Vol.4, No.1, 120-152.

Human Right Watch 1992. “Endless Torment: the 1991 Uprising in Iraq and Its Aftermath”, June 1,
<https://www.hrw.org/report/1992/06/01/endless-torment/1991-uprising-iraq-and-its-aftermath>

Hurd, Elizabeth Shakman 2015. “Politics of Sectarianism: Rethinking Religion and Politics in the Middle East,” *Middle East Law and Governance*. Vol. 7, 61-75.

Louer, Laurence 2012. *Transnational Shia Politics, Religious and Political Networks in the Gulf*, London: Hurst.

Marechal, Brigitte and Sami Zemni eds. 2013. *The Dynamics of Sunni-Shia Relationships: Doctrine, Transnationalism, Intellectuals and the Media*. London: Hurst.

Maher, Shiraz 2016. *Salafi-Jihadism: The History of an Idea*. London: Hurst.

Malmvig, Helle 2015. “Coming in from the Cold; How we may take sectarian identity politics seriously in the Middle East without playing to the tunes of regional power elites”, POMEPS
<https://pomeps.org/2015/08/19/coming-in-from-the-cold-how-we-may-take-sectarian-identity-politics-seriously-in-the-middle-east-without-playing-to-the-tunes-of-regional-power-elites/>

Mansour, Renad, and Faleh A. Jabar, 2017. “The Popular Mobilization Forces and Iraq’s Future”, Carnegie Middle East Center,

<http://carnegie-mec.org/2017/04/28/popular-mobilization-forces-and-iraq-s-future-pub-68810>

- Matthiesen, Toby 2013. *Sectarian Gulf: Bahrain, Saudi Arabia, and the Arab Spring That Wasn't*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- 2015. *The Other Saudis: Shiism, Dissent and Sectarianism*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Mneimneh, Hassan 2016. “From Communitarianism to Sectarianism: The Trajectory of Factionalism in the Arab Middle East,” *Muslim World*, Vol. 106, No. 1 (January) 62–82.
- Osman, Khalil 2014. *Sectarianism in Iraq: The Making of State and Nation Since 1920*. London and New York: Routledge.
- Potter, Lawrence G. 2014. *Sectarian Politics in the Persian Gulf*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- Ra‘ūf, ‘Ādil 2000. *Al-‘amal al-islāmīya fil-‘irāq bayna al-marjā‘īya wal-hizbīya: qirā naqdīya li-maṣīrāt nisf qarn 1950-2000*, Dimashq: al-markaz al-‘irāqī lil-i’lām wal-dirāsāt.
- Rougier, Bernard 2015. *The Sunni Tragedy in the Middle East: Northern Lebanon from al-Qaeda to ISIS*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Sakai, Keiko 2003. “The 1991 Intifadah in Iraq: Seen through Analyses of the Discourses of Iraqi Intellectuals,” Sakai Keiko ed., *Social Protests and Nation-building in the Middle East and Central Asia*. IDE Development Perspective Series No.1, Tokyo: Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization, pp.157-171.
- Sha‘bān, ‘Abd al-Ḥusayn, 1994. *‘Āṣifa ‘ala “bilād al-shams”: dirāsāt fi qaḍāya al-ḥarb wal-fikr al-siyāsī al-‘irāqī*, Bayrūt: Dār al-Kunūz al-‘adabīya
- Steinberg, Guido 2009. “Jihadi-Salafism and the Shi’is: Remarks about the Intellectual Roots of Anti-Shiism,” Roel Meijer ed., *Global Salafism: Islam’s New Religious Movement*. London: Hurst.
- Visser, Reidar 2012. “The Sectarian Master Narrative in Iraqi Historiography: New Challenges since 2003,” Jordi Tejel, Peter Sluglett, Riccardo Bocco, Hamit Bozarslan eds., *Writing the Modern History of Iraq*. Hackensack, NJ: World Scientific, pp. 47-59.
- Wagemakers, Joas 2014. “The Transformation of a Radical Concept: al-wala’ wa-l-bara’ in the Ideology of Abu Muhammad al-Maqdisi,” Roel Meijer ed., *Global Salafism: Islam’s New Religious Movement*. London: Hurst.
- Wehrey, Frederic 2014. *Sectarian Politics in the Gulf: From the Iraq War to the Arab Uprisings*.

New York: Columbia University Press.

————— 2017. *Beyond Sunni and Shia: The Roots of Sectarianism in a Changing Middle East*,
Oxford and New York: Oxford University Press

Weiss, Max 2010. *In the Shadow of Sectarianism: Law, Shi'ism, and the Making of Modern
Lebanon*, Cambridge: Harvard University Press

————— 2017. The Matter of Sectarianism, Ghazal, Amal and Jens Hanssen eds., *The Oxford
Handbook of Contemporary Middle Eastern and North African History*,
10.1093/oxfordhb/9780199672530.013.23

酒井啓子 2015. 「イラクの宗派問題—その国内要因と国外要因」 大串和雄編『21 世紀の政
治と暴力—グローバル化, 民主主義, アイデンティティ』晃洋書房、19-45

酒井啓子 2017. 「戦後のイラクで何が対立しているのか——関係性の結果としての宗派——」
『国際政治』189号、17-32